

狂言小歌の拍節

高 桑 いづみ

狂言が酒盛りの場面などで余興として舞ったり謡ったりする小舞謡は、現在大蔵流に五十九番、和泉流に七十一番あると言われているが、能の謡を転用したもの、中世から近世にかけて流行した流行歌を撰取したものなど、さまざまな歌謡が取り込まれている。

そのうち流行歌經由の小舞謡は、拍子に合う謡と拍子不合の二種類に分類される、と言われてきた。拍子に合う謡は一字一拍を基本とし、ときおり「タンタタ・タンタタ・タンタタ」と近古式平ノリ句を混在させるノリで、横道萬里雄氏は狂言ノリと命名している。「□¹な²な³つ⁴にな⁵る⁶が⁷い⁸いた⁹い¹⁰け¹¹な¹²こ¹³と¹⁴ゆ¹⁵た¹⁶く¹⁷よ¹⁸し¹⁹の²⁰は²¹つ²²せ²³の²⁴は²⁵な²⁶よ²⁷り²⁸も²⁹」と謡う「七つ子」がその代表である。一方の拍子不合の謡は、五線譜にはとうてい乗らない不思議な音を散りばめながらユリをたつぷりとつけて謡う小歌で、「柴垣」がその代表と言えよう。

狂言の小歌は狂言ノリか拍子不合のどちら

かに分類できる、と思っていたのだがどうもそうではないらしい。「十七八」(野村家では「細布」は、六世野村万蔵師の名演(ビクターレコードLR-500)に聞き惚れていたもので、拍子不合の小歌だと思いきんでいた。万蔵師は、「十しちーいはくくアちーいわアアアア、さおにほいたくくアほそぬの」とマワシヤフリにたつぷりユリをつけて謡っている。『狂言の道』の中で、「習い物の中にある春雨から住吉までの六番(春雨・細布・柴垣・薬師・鎌倉・住吉 筆者注)を小歌といっています。これらは他のものとは違った特殊な吟の細かい変化があり、その内容も当時のいわゆる流行歌謡風であります」と発言された通りの特殊な吟である。

ところが茂山家では謡い方がまったく異なり、「□¹さ²お³に⁴ほ⁵いた⁶ア⁷ほ⁸そ⁹ぬ¹⁰の¹¹ー¹²。と¹³り¹⁴り¹⁵よ¹⁶り¹⁷や¹⁸い¹⁹ー²⁰と²¹し²²ー²³い²⁴ー²⁵た²⁶ぐ²⁷り²⁸よ²⁹り³⁰や³¹い³²ー³³と³⁴し³⁵ー³⁶」とリズムカルに謡うし、同じ和泉流でも名古屋の野村又三郎家は万蔵

師のようにユリは附けず、茂山家に近いノリで謡う。「十七八」は拍子合、拍子不合、どちらが本来なのだろうか。

狂言の台本には節付けや間拍子を記したものが少ないが、古典文庫に、文政末年に山脇和泉元業が書写した雲形本系の写本が収められており、そこに十二曲の小舞謡の節付けと拍子当たりを示した箇所がある。万蔵師が小歌と指定した「住吉」「痛物細(柴垣の別名)」「鎌倉の上臈(鎌倉の別名)」にもヤア・ヤアといった謡い出しの指示のほか、第一・三拍にあたる文字の横に△、第五・七・八拍にあたる文字の横に○・○がついている。△は大鼓、○は小鼓の音を示す記号で、「三地」という鼓のリズムパターンで拍当たりを示す典型的な手法である。「痛物細」ならば「い¹と²も³ほ⁴そ⁵き⁶お⁷ん⁸こ⁹し¹⁰ー¹¹に¹²□¹³△¹⁴△¹⁵△¹⁶△¹⁷△¹⁸△¹⁹△²⁰△²¹△²²△²³△²⁴△²⁵△²⁶△²⁷△²⁸△²⁹△³⁰△³¹△³²△³³△³⁴△³⁵△³⁶△³⁷△³⁸△³⁹△⁴⁰△⁴¹△⁴²△⁴³△⁴⁴△⁴⁵△⁴⁶△⁴⁷△⁴⁸△⁴⁹△⁵⁰△⁵¹△⁵²△⁵³△⁵⁴△⁵⁵△⁵⁶△⁵⁷△⁵⁸△⁵⁹△⁶⁰△⁶¹△⁶²△⁶³△⁶⁴△⁶⁵△⁶⁶△⁶⁷△⁶⁸△⁶⁹△⁷⁰△⁷¹△⁷²△⁷³△⁷⁴△⁷⁵△⁷⁶△⁷⁷△⁷⁸△⁷⁹△⁸⁰△⁸¹△⁸²△⁸³△⁸⁴△⁸⁵△⁸⁶△⁸⁷△⁸⁸△⁸⁹△⁹⁰△⁹¹△⁹²△⁹³△⁹⁴△⁹⁵△⁹⁶△⁹⁷△⁹⁸△⁹⁹△¹⁰⁰△¹⁰¹△¹⁰²△¹⁰³△¹⁰⁴△¹⁰⁵△¹⁰⁶△¹⁰⁷△¹⁰⁸△¹⁰⁹△¹¹⁰△¹¹¹△¹¹²△¹¹³△¹¹⁴△¹¹⁵△¹¹⁶△¹¹⁷△¹¹⁸△¹¹⁹△¹²⁰△¹²¹△¹²²△¹²³△¹²⁴△¹²⁵△¹²⁶△¹²⁷△¹²⁸△¹²⁹△¹³⁰△¹³¹△¹³²△¹³³△¹³⁴△¹³⁵△¹³⁶△¹³⁷△¹³⁸△¹³⁹△¹⁴⁰△¹⁴¹△¹⁴²△¹⁴³△¹⁴⁴△¹⁴⁵△¹⁴⁶△¹⁴⁷△¹⁴⁸△¹⁴⁹△¹⁵⁰△¹⁵¹△¹⁵²△¹⁵³△¹⁵⁴△¹⁵⁵△¹⁵⁶△¹⁵⁷△¹⁵⁸△¹⁵⁹△¹⁶⁰△¹⁶¹△¹⁶²△¹⁶³△¹⁶⁴△¹⁶⁵△¹⁶⁶△¹⁶⁷△¹⁶⁸△¹⁶⁹△¹⁷⁰△¹⁷¹△¹⁷²△¹⁷³△¹⁷⁴△¹⁷⁵△¹⁷⁶△¹⁷⁷△¹⁷⁸△¹⁷⁹△¹⁸⁰△¹⁸¹△¹⁸²△¹⁸³△¹⁸⁴△¹⁸⁵△¹⁸⁶△¹⁸⁷△¹⁸⁸△¹⁸⁹△¹⁹⁰△¹⁹¹△¹⁹²△¹⁹³△¹⁹⁴△¹⁹⁵△¹⁹⁶△¹⁹⁷△¹⁹⁸△¹⁹⁹△²⁰⁰△²⁰¹△²⁰²△²⁰³△²⁰⁴△²⁰⁵△²⁰⁶△²⁰⁷△²⁰⁸△²⁰⁹△²¹⁰△²¹¹△²¹²△²¹³△²¹⁴△²¹⁵△²¹⁶△²¹⁷△²¹⁸△²¹⁹△²²⁰△²²¹△²²²△²²³△²²⁴△²²⁵△²²⁶△²²⁷△²²⁸△²²⁹△²³⁰△²³¹△²³²△²³³△²³⁴△²³⁵△²³⁶△²³⁷△²³⁸△²³⁹△²⁴⁰△²⁴¹△²⁴²△²⁴³△²⁴⁴△²⁴⁵△²⁴⁶△²⁴⁷△²⁴⁸△²⁴⁹△²⁵⁰△²⁵¹△²⁵²△²⁵³△²⁵⁴△²⁵⁵△²⁵⁶△²⁵⁷△²⁵⁸△²⁵⁹△²⁶⁰△²⁶¹△²⁶²△²⁶³△²⁶⁴△²⁶⁵△²⁶⁶△²⁶⁷△²⁶⁸△²⁶⁹△²⁷⁰△²⁷¹△²⁷²△²⁷³△²⁷⁴△²⁷⁵△²⁷⁶△²⁷⁷△²⁷⁸△²⁷⁹△²⁸⁰△²⁸¹△²⁸²△²⁸³△²⁸⁴△²⁸⁵△²⁸⁶△²⁸⁷△²⁸⁸△²⁸⁹△²⁹⁰△²⁹¹△²⁹²△²⁹³△²⁹⁴△²⁹⁵△²⁹⁶△²⁹⁷△²⁹⁸△²⁹⁹△³⁰⁰△³⁰¹△³⁰²△³⁰³△³⁰⁴△³⁰⁵△³⁰⁶△³⁰⁷△³⁰⁸△³⁰⁹△³¹⁰△³¹¹△³¹²△³¹³△³¹⁴△³¹⁵△³¹⁶△³¹⁷△³¹⁸△³¹⁹△³²⁰△³²¹△³²²△³²³△³²⁴△³²⁵△³²⁶△³²⁷△³²⁸△³²⁹△³³⁰△³³¹△³³²△³³³△³³⁴△³³⁵△³³⁶△³³⁷△³³⁸△³³⁹△³⁴⁰△³⁴¹△³⁴²△³⁴³△³⁴⁴△³⁴⁵△³⁴⁶△³⁴⁷△³⁴⁸△³⁴⁹△³⁵⁰△³⁵¹△³⁵²△³⁵³△³⁵⁴△³⁵⁵△³⁵⁶△³⁵⁷△³⁵⁸△³⁵⁹△³⁶⁰△³⁶¹△³⁶²△³⁶³△³⁶⁴△³⁶⁵△³⁶⁶△³⁶⁷△³⁶⁸△³⁶⁹△³⁷⁰△³⁷¹△³⁷²△³⁷³△³⁷⁴△³⁷⁵△³⁷⁶△³⁷⁷△³⁷⁸△³⁷⁹△³⁸⁰△³⁸¹△³⁸²△³⁸³△³⁸⁴△³⁸⁵△³⁸⁶△³⁸⁷△³⁸⁸△³⁸⁹△³⁹⁰△³⁹¹△³⁹²△³⁹³△³⁹⁴△³⁹⁵△³⁹⁶△³⁹⁷△³⁹⁸△³⁹⁹△⁴⁰⁰△⁴⁰¹△⁴⁰²△⁴⁰³△⁴⁰⁴△⁴⁰⁵△⁴⁰⁶△⁴⁰⁷△⁴⁰⁸△⁴⁰⁹△⁴¹⁰△⁴¹¹△⁴¹²△⁴¹³△⁴¹⁴△⁴¹⁵△⁴¹⁶△⁴¹⁷△⁴¹⁸△⁴¹⁹△⁴²⁰△⁴²¹△⁴²²△⁴²³△⁴²⁴△⁴²⁵△⁴²⁶△⁴²⁷△⁴²⁸△⁴²⁹△⁴³⁰△⁴³¹△⁴³²△⁴³³△⁴³⁴△⁴³⁵△⁴³⁶△⁴³⁷△⁴³⁸△⁴³⁹△⁴⁴⁰△⁴⁴¹△⁴⁴²△⁴⁴³△⁴⁴⁴△⁴⁴⁵△⁴⁴⁶△⁴⁴⁷△⁴⁴⁸△⁴⁴⁹△⁴⁵⁰△⁴⁵¹△⁴⁵²△⁴⁵³△⁴⁵⁴△⁴⁵⁵△⁴⁵⁶△⁴⁵⁷△⁴⁵⁸△⁴⁵⁹△⁴⁶⁰△⁴⁶¹△⁴⁶²△⁴⁶³△⁴⁶⁴△⁴⁶⁵△⁴⁶⁶△⁴⁶⁷△⁴⁶⁸△⁴⁶⁹△⁴⁷⁰△⁴⁷¹△⁴⁷²△⁴⁷³△⁴⁷⁴△⁴⁷⁵△⁴⁷⁶△⁴⁷⁷△⁴⁷⁸△⁴⁷⁹△⁴⁸⁰△⁴⁸¹△⁴⁸²△⁴⁸³△⁴⁸⁴△⁴⁸⁵△⁴⁸⁶△⁴⁸⁷△⁴⁸⁸△⁴⁸⁹△⁴⁹⁰△⁴⁹¹△⁴⁹²△⁴⁹³△⁴⁹⁴△⁴⁹⁵△⁴⁹⁶△⁴⁹⁷△⁴⁹⁸△⁴⁹⁹△⁵⁰⁰△⁵⁰¹△⁵⁰²△⁵⁰³△⁵⁰⁴△⁵⁰⁵△⁵⁰⁶△⁵⁰⁷△⁵⁰⁸△⁵⁰⁹△⁵¹⁰△⁵¹¹△⁵¹²△⁵¹³△⁵¹⁴△⁵¹⁵△⁵¹⁶△⁵¹⁷△⁵¹⁸△⁵¹⁹△⁵²⁰△⁵²¹△⁵²²△⁵²³△⁵²⁴△⁵²⁵△⁵²⁶△⁵²⁷△⁵²⁸△⁵²⁹△⁵³⁰△⁵³¹△⁵³²△⁵³³△⁵³⁴△⁵³⁵△⁵³⁶△⁵³⁷△⁵³⁸△⁵³⁹△⁵⁴⁰△⁵⁴¹△⁵⁴²△⁵⁴³△⁵⁴⁴△⁵⁴⁵△⁵⁴⁶△⁵⁴⁷△⁵⁴⁸△⁵⁴⁹△⁵⁵⁰△⁵⁵¹△⁵⁵²△⁵⁵³△⁵⁵⁴△⁵⁵⁵△⁵⁵⁶△⁵⁵⁷△⁵⁵⁸△⁵⁵⁹△⁵⁶⁰△⁵⁶¹△⁵⁶²△⁵⁶³△⁵⁶⁴△⁵⁶⁵△⁵⁶⁶△⁵⁶⁷△⁵⁶⁸△⁵⁶⁹△⁵⁷⁰△⁵⁷¹△⁵⁷²△⁵⁷³△⁵⁷⁴△⁵⁷⁵△⁵⁷⁶△⁵⁷⁷△⁵⁷⁸△⁵⁷⁹△⁵⁸⁰△⁵⁸¹△⁵⁸²△⁵⁸³△⁵⁸⁴△⁵⁸⁵△⁵⁸⁶△⁵⁸⁷△⁵⁸⁸△⁵⁸⁹△⁵⁹⁰△⁵⁹¹△⁵⁹²△⁵⁹³△⁵⁹⁴△⁵⁹⁵△⁵⁹⁶△⁵⁹⁷△⁵⁹⁸△⁵⁹⁹△⁶⁰⁰△⁶⁰¹△⁶⁰²△⁶⁰³△⁶⁰⁴△⁶⁰⁵△⁶⁰⁶△⁶⁰⁷△⁶⁰⁸△⁶⁰⁹△⁶¹⁰△⁶¹¹△⁶¹²△⁶¹³△⁶¹⁴△⁶¹⁵△⁶¹⁶△⁶¹⁷△⁶¹⁸△⁶¹⁹△⁶²⁰△⁶²¹△⁶²²△⁶²³△⁶²⁴△⁶²⁵△⁶²⁶△⁶²⁷△⁶²⁸△⁶²⁹△⁶³⁰△⁶³¹△⁶³²△⁶³³△⁶³⁴△⁶³⁵△⁶³⁶△⁶³⁷△⁶³⁸△⁶³⁹△⁶⁴⁰△⁶⁴¹△⁶⁴²△⁶⁴³△⁶⁴⁴△⁶⁴⁵△⁶⁴⁶△⁶⁴⁷△⁶⁴⁸△⁶⁴⁹△⁶⁵⁰△⁶⁵¹△⁶⁵²△⁶⁵³△⁶⁵⁴△⁶⁵⁵△⁶⁵⁶△⁶⁵⁷△⁶⁵⁸△⁶⁵⁹△⁶⁶⁰△⁶⁶¹△⁶⁶²△⁶⁶³△⁶⁶⁴△⁶⁶⁵△⁶⁶⁶△⁶⁶⁷△⁶⁶⁸△⁶⁶⁹△⁶⁷⁰△⁶⁷¹△⁶⁷²△⁶⁷³△⁶⁷⁴△⁶⁷⁵△⁶⁷⁶△⁶⁷⁷△⁶⁷⁸△⁶⁷⁹△⁶⁸⁰△⁶⁸¹△⁶⁸²△⁶⁸³△⁶⁸⁴△⁶⁸⁵△⁶⁸⁶△⁶⁸⁷△⁶⁸⁸△⁶⁸⁹△⁶⁹⁰△⁶⁹¹△⁶⁹²△⁶⁹³△⁶⁹⁴△⁶⁹⁵△⁶⁹⁶△⁶⁹⁷△⁶⁹⁸△⁶⁹⁹△⁷⁰⁰△⁷⁰¹△⁷⁰²△⁷⁰³△⁷⁰⁴△⁷⁰⁵△⁷⁰⁶△⁷⁰⁷△⁷⁰⁸△⁷⁰⁹△⁷¹⁰△⁷¹¹△⁷¹²△⁷¹³△⁷¹⁴△⁷¹⁵△⁷¹⁶△⁷¹⁷△⁷¹⁸△⁷¹⁹△⁷²⁰△⁷²¹△⁷²²△⁷²³△⁷²⁴△⁷²⁵△⁷²⁶△⁷²⁷△⁷²⁸△⁷²⁹△⁷³⁰△⁷³¹△⁷³²△⁷³³△⁷³⁴△⁷³⁵△⁷³⁶△⁷³⁷△⁷³⁸△⁷³⁹△⁷⁴⁰△⁷⁴¹△⁷⁴²△⁷⁴³△⁷⁴⁴△⁷⁴⁵△⁷⁴⁶△⁷⁴⁷△⁷⁴⁸△⁷⁴⁹△⁷⁵⁰△⁷⁵¹△⁷⁵²△⁷⁵³△⁷⁵⁴△⁷⁵⁵△⁷⁵⁶△⁷⁵⁷△⁷⁵⁸△⁷⁵⁹△⁷⁶⁰△⁷⁶¹△⁷⁶²△⁷⁶³△⁷⁶⁴△⁷⁶⁵△⁷⁶⁶△⁷⁶⁷△⁷⁶⁸△⁷⁶⁹△⁷⁷⁰△⁷⁷¹△⁷⁷²△⁷⁷³△⁷⁷⁴△⁷⁷⁵△⁷⁷⁶△⁷⁷⁷△⁷⁷⁸△⁷⁷⁹△⁷⁸⁰△⁷⁸¹△⁷⁸²△⁷⁸³△⁷⁸⁴△⁷⁸⁵△⁷⁸⁶△⁷⁸⁷△⁷⁸⁸△⁷⁸⁹△⁷⁹⁰△⁷⁹¹△⁷⁹²△⁷⁹³△⁷⁹⁴△⁷⁹⁵△⁷⁹⁶△⁷⁹⁷△⁷⁹⁸△⁷⁹⁹△⁸⁰⁰△⁸⁰¹△⁸⁰²△⁸⁰³△⁸⁰⁴△⁸⁰⁵△⁸⁰⁶△⁸⁰⁷△⁸⁰⁸△⁸⁰⁹△⁸¹⁰△⁸¹¹△⁸¹²△⁸¹³△⁸¹⁴△⁸¹⁵△⁸¹⁶△⁸¹⁷△⁸¹⁸△⁸¹⁹△⁸²⁰△⁸²¹△⁸²²△⁸²³△⁸²⁴△⁸²⁵△⁸²⁶△⁸²⁷△⁸²⁸△⁸²⁹△⁸³⁰△⁸³¹△⁸³²△⁸³³△⁸³⁴△⁸³⁵△⁸³⁶△⁸³⁷△⁸³⁸△⁸³⁹△⁸⁴⁰△⁸⁴¹△⁸⁴²△⁸⁴³△⁸⁴⁴△⁸⁴⁵△⁸⁴⁶△⁸⁴⁷△⁸⁴⁸△⁸⁴⁹△⁸⁵⁰△⁸⁵¹△⁸⁵²△⁸⁵³△⁸⁵⁴△⁸⁵⁵△⁸⁵⁶△⁸⁵⁷△⁸⁵⁸△⁸⁵⁹△⁸⁶⁰△⁸⁶¹△⁸⁶²△⁸⁶³△⁸⁶⁴△⁸⁶⁵△⁸⁶⁶△⁸⁶⁷△⁸⁶⁸△⁸⁶⁹△⁸⁷⁰△⁸⁷¹△⁸⁷²△⁸⁷³△⁸⁷⁴△⁸⁷⁵△⁸⁷⁶△⁸⁷⁷△⁸⁷⁸△⁸⁷⁹△⁸⁸⁰△⁸⁸¹△⁸⁸²△⁸⁸³△⁸⁸⁴△⁸⁸⁵△⁸⁸⁶△⁸⁸⁷△⁸⁸⁸△⁸⁸⁹△⁸⁹⁰△⁸⁹¹△⁸⁹²△⁸⁹³△⁸⁹⁴△⁸⁹⁵△⁸⁹⁶△⁸⁹⁷△⁸⁹⁸△⁸⁹⁹△⁹⁰⁰△⁹⁰¹△⁹⁰²△⁹⁰³△⁹⁰⁴△⁹⁰⁵△⁹⁰⁶△⁹⁰⁷△⁹⁰⁸△⁹⁰⁹△⁹¹⁰△⁹¹¹△⁹¹²△⁹¹³△⁹¹⁴△⁹¹⁵△⁹¹⁶△⁹¹⁷△⁹¹⁸△⁹¹⁹△⁹²⁰△⁹²¹△⁹²²△⁹²³△⁹²⁴△⁹²⁵△⁹²⁶△⁹²⁷△⁹²⁸△⁹²⁹△⁹³⁰△⁹³¹△⁹³²△⁹³³△⁹³⁴△⁹³⁵△⁹³⁶△⁹³⁷△⁹³⁸△⁹³⁹△⁹⁴⁰△⁹⁴¹△⁹⁴²△⁹⁴³△⁹⁴⁴△⁹⁴⁵△⁹⁴⁶△⁹⁴⁷△⁹⁴⁸△⁹⁴⁹△⁹⁵⁰△⁹⁵¹△⁹⁵²△⁹⁵³△⁹⁵⁴△⁹⁵⁵△⁹⁵⁶△⁹⁵⁷△⁹⁵⁸△⁹⁵⁹△⁹⁶⁰△⁹⁶¹△⁹⁶²△⁹⁶³△⁹⁶⁴△⁹⁶⁵△⁹⁶⁶△⁹⁶⁷△⁹⁶⁸△⁹⁶⁹△⁹⁷⁰△⁹⁷¹△⁹⁷²△⁹⁷³△⁹⁷⁴△⁹⁷⁵△⁹⁷⁶△⁹⁷⁷△⁹⁷⁸△⁹⁷⁹△⁹⁸⁰△⁹⁸¹△⁹⁸²△⁹⁸³△⁹⁸⁴△⁹⁸⁵△⁹⁸⁶△⁹⁸⁷△⁹⁸⁸△⁹⁸⁹△⁹⁹⁰△⁹⁹¹△⁹⁹²△⁹⁹³△⁹⁹⁴△⁹⁹⁵△⁹⁹⁶△⁹⁹⁷△⁹⁹⁸△⁹⁹⁹△¹⁰⁰⁰△¹⁰⁰¹△¹⁰⁰²△¹⁰⁰³△¹⁰⁰⁴△¹⁰⁰⁵△¹⁰⁰⁶△¹⁰⁰⁷△¹⁰⁰⁸△¹⁰⁰⁹△¹⁰¹⁰△¹⁰¹¹△¹⁰¹²△¹⁰¹³△¹⁰¹⁴△¹⁰¹⁵△¹⁰¹⁶△¹⁰¹⁷△¹⁰¹⁸△¹⁰¹⁹△¹⁰²⁰△¹⁰²¹△¹⁰²²△¹⁰²³△¹⁰²⁴△¹⁰²⁵△¹⁰²⁶△¹⁰²⁷△¹⁰²⁸△¹⁰²⁹△¹⁰³⁰△¹⁰³¹△¹⁰³²△¹⁰³³△¹⁰³⁴△¹⁰³⁵△¹⁰³⁶△¹⁰³⁷△¹⁰³⁸△¹⁰³⁹△¹⁰⁴⁰△¹⁰⁴¹△¹⁰⁴²△¹⁰⁴³△¹⁰⁴⁴△¹⁰⁴⁵△¹⁰⁴⁶△¹⁰⁴⁷△¹⁰⁴⁸△¹⁰⁴⁹△¹⁰⁵⁰△¹⁰⁵¹△¹⁰⁵²△¹⁰⁵³△¹⁰⁵⁴△¹⁰⁵⁵△¹⁰⁵⁶△¹⁰⁵⁷△¹⁰⁵⁸△¹⁰⁵⁹△¹⁰⁶⁰△¹⁰⁶¹△¹⁰⁶²△¹⁰⁶³△¹⁰⁶⁴△¹⁰⁶⁵△¹⁰⁶⁶△¹⁰⁶⁷△¹⁰⁶⁸△¹⁰⁶⁹△¹⁰⁷⁰△¹⁰⁷¹△¹⁰⁷²△¹⁰⁷³△¹⁰⁷⁴△¹⁰⁷⁵△¹⁰⁷⁶△¹⁰⁷⁷△<

「痛物細」には一句四拍のトリ地や一句六拍の片地が多いので、拍子不合の謡を無理に拍子に収めた可能性も否定できないが、それでも拍子合の謡に還元できてしまう点に注目したい。

天保十年に和泉元業が書写した『和泉流六儀拔抄』（法政大学能楽研究所蔵）にも「春雨」「十七八」「いとをし若衆」が載っており、「春雨」と「いとをし若衆」の詞章の横には同じように△や○が、「十七」にはヤ・ヤアなど謡い出しの間が書かれている。万蔵師が小歌とされた六曲のうち、「薬師」以外の小歌はすべて拍子合の譜が確認できたのである。

『狂言の道』を読み直してみると、万蔵師は「拍子不合」で謡うと書かれたわけではない。細かい吟の扱いがあるという言である。あまりに自在な謡なので、研究者側が拍子不合と思いきんではまったのではなからうか。

大蔵流はどうだろうか。寛政七年大蔵虎寛筆と奥書がある『小舞謡 廿二番』（山本東次郎家蔵）には「柴垣」と「住吉」が入っている。大蔵流ではこの二曲を拍子不合の小歌としているが、「柴垣」の冒頭だけに「小歌」と記される。現在と同じ箇所にはユリの記号が付いている。ユリがついているのは、いずれもマワシ節をくり返して音を上下させて謡うところなので、上下行をくり返すうちに独自のユリに発展した可能性も考えられる。「住吉」には小歌の表記もユリの記号もないので、寛政七年

の時点では、「柴垣」と同列の扱いではなかったようだ。虎寛本には間拍子の指示はないのだが、元業による八割譜を見ながら大蔵流の「住吉」「比丘貞（和泉流の鎌倉）」「柴垣」を聴いてみると、平ノリ句はモチをなくしてスツスツと謡い、ユリは、音を延ばしてもおかしくない箇所（「柴垣」の「おんこしーにー」「矢ーおーい」など）にたっぷりつけていることがわかる。そうした技法を元に戻せば元業本と多少異なる箇所もあるが、ほぼ同じ八割譜に収まってしまおう。

和泉流・大蔵流ともに江戸初期まで遡る資料を見つけていないのだが、参考になりそうなのが、江戸時代初期に作られた一調である。四代目の家元長右衛門宣安が、將軍家光に手付けを命じられた一調「龍田河辺」が、秘曲として現在でも伝承されているのだが、『四座役者目録』ではこれを「立田河辺の小唄」と呼んでいる。江戸末期の伝本「番外謡 七十一番」（鴻山文庫蔵）によると「□たーつーたーかーわーべーにーふーねーとーめーてー」と一字一拍を基準とするノリで、ほとんどの句を第一拍にあてて謡い出す。この小歌が当時流行していたのか、それとも新たに創作されたのか不明だが、「小歌」とは「放下僧」のように一字一拍にあてて謡うもの、この小歌の作者を始め、江戸初期の能の世界ではそう理解していたことになるだろう。

拍子合の小歌が拍子不合風に移行するきっかけがなんだったのか、推測するしかないのだが、そのヒントになりそうなのが、SPレコードに吹き込まれた観世清廉師の『放下僧』の「小歌」である。明治時代の観世流家元であった清廉師の謡を聴くと、一字一拍で淡々と進むはずのノリが実に自在で驚いてしまう。フシが上音にあがるところや増フシのあるところはなかなかたっぷり間をとってメロディを聞かせ、中音・下音が続くところはスツスツと進む。拍子に合う謡だと知っていても拍子を取りながら聴くのは至難のことだし、このように謡われたら鼓は打てないだろう、と思うほどの自在さである。能の場合は囃子、という大きな制約があるので清廉師の謡は大夫芸で終わったのだが、鼓の入らない狂言謡は、拍子の制約が少ない。さまざまな工夫を重ねて、拍子不合に見まごう情感豊かな謡に変身しうる自由さがあったのだろう。

ところで、虎寛の謡本や古典文庫本には「水汲（大蔵流は「御茶の水」）の小歌も載っているのだが、そこには所要所にユリの記号が見られる。小歌で綴る、まさに小歌の集大成といえるのが「水汲」だが、小舞謡にさきがけて拍子不合風の謡へ変貌しつつあったのだろう。これについては、稿を改めて考察することにした。（高桑いづみ 東京文化財研究所）